
隣のコードドラゴン様

尾黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣のコドモドラゴン様

【Nコード】

N3768U

【作者名】

尾黒

【あらすじ】

「なあ、聞いてくれよ！ おれんち、ペット飼うことになったんだ」「へえ、何飼うんだ？」「なんと……コドモドラゴンなんだ！」「は？ ……コドモドラゴン？」▼ちよっとお馬鹿な高二男子の、軽い会話文のみのお話。ファンタジックな話が始まったとたんに終了する、短編。 まあ、よくあるよねっていうネタです。

「なあ、聞いてくれよ！ おれん家の庭に捨てられてた動物がいてさ、飼うことにしたんだ！」

「へえ。何飼うんだ？ …… って、あれ？ たしか、お前んちのねーちゃん、アレルギーだから犬とか猫は飼えないって言ってたかったか？」

「良く覚えてんな。まさか、ねーちゃん狙ってたのかお前」

「お前んちのねーちゃんは、男作る気ねえだろ。この間、コスプレ衣装の試着してるところ見せてもらったもん。お前のプレステに常に入ってるあのファンタジックな戦国格ゲーのアレ」

「…… すまん。なんつーか、…… 本当に、すまん」

「いや、別に。似合ってたからいいんじゃない？ どっちかつつと、伊達政宗じゃなくて、魔王の嫁の方が足も出るし胸元全開だし、大人の女って感じで似合うと思うけど。おっぱいデケーし。わざわざ押し潰してまで衣装着る意味がわかんねえ。あ、でも、潰しきれないはみ出た部分がまたイイ感じだったけど」

「お前、やっぱり狙ってたんだろ！！」

「狙ってねえつつうの！！ 俺はただデカイパイが好きただけだ！ つーか、そんなとこまで見せられてる俺はお前と同じ弟扱いだっ

つうのー！　つーか、……一緒にコスプレしないかって誘われたし……」

「……すまん。なんつーか、……本当に、すまん」

「いや、いいんだ。俺も悪かったな、おっぱいに目がくらんで余計なこと言った……。えっと、なんだっけか。ペットの話だったか？」

「……ああ、そうそう。なんかさ、爬虫類系？　聞いて驚け……なんとー！」

「爬虫類かよ。まあ、アレルギー関係ないもんな」

「聞けよー！」

「聞いてるって。で、なんなんだ？　カメレオンとかか？」

「いや、なんと……コドモドラゴンなんだ！」

「は？　……コモドラゴン？　あの、でかいヤツか？　あれって、一般家庭で飼っていいのか？」

「えー？　駄目なのか！？　でも、うちの庭にいたってことは、もううちの子よっー！」

「いやいや、まてまて。ほら、あるだろ。飼っちゃ駄目な動物とかさ。なんか、生態系が崩れるとか、輸入しちゃ駄目な決まりのある動物だったりするとさ」

「あー……。確かに、生態系は崩れるかもなあ……。でも、まだ生

まれてすぐみたいだし、うちの家族にスンゲーなついてるし、食べ物なんでも食うし……癒されるし……」

「コモドドラゴンって懐くのか！？　つか、癒されるか！？　あの巨体で！？」

「うちにいるやつはまだ小さいからかなー。スンゲー甘えてくるぞ。尻尾ぶんぶん振って、犬みてえ」

「コモドドラゴンが！？」

「へ？　うん、子どものドラゴンだけど、懐いてるぞ。名前はドラちゃんなんだぜ」

「名前付けたのかよ！　飼う気満々だなっ！！　つか、ドラ焼き好きそうな名前付けんなよ」

「ドラ焼きは食わせたことねえけどな。まあ、色がさ、青いから」

「青！？　そんなのいるのかよ！」

「結構きれいな色してるぞ。ねーちゃんなんてメロメロでさあ。顔舐められて身悶えてんの。かわゆすぎるー！！　って叫んでるし」

「それ、食料として味見されてるとかじゃないよな……？　肉食だろ、ドラちゃんは」

「いやー。結構甘いものとかスナック菓子も食ってっぞ。おれのへそくり食われてたもん」

「お前のへそくりつてあれだろ、ベッドの下の駄菓子ボックス。そりゃねーちゃんが食ったんだって。ドラちゃんが勝手にあけて勝手に食えるような構造してねえだろが」

「いや、ほんとなんだって！ 口の周りにポテトチップのカスついてたんだって！ 夏限定のゆず胡椒味のヤツ！！ あ、いやでも、ねーちゃんがあけて、食わせてやったのかな……」

「つか、今気付いたけど、ドラちゃん、家の中で放し飼いだよ！ あぶねーだろ！！」

「まあ、そうだよな、小さいとはいえ、結構自由に動き回って……」

「そういうことじゃねえし！ つか、日本で本当に飼っていいのかもわかんねえし、一度調べた方がいいぞ。」

「や、おれ、そーいうの苦手……」

「お前のねーちゃんは得意だろ」

「だって、ねーちゃんはドラちゃん飼うって決めちまってるし……」

「……ねーちゃんの言うことは絶対だもんな」

「おれだって、あんなに懐いてるアイツを今更どっかにやるなんて、できねーよ」

「お前、動物好きだったんだな。対象がアレだけど」

「会ってみりゃお前にもわかるって。今日遊びに来いよ」

「んー……。そうだな。んじゃ、帰りに寄るか。帰りまでに俺も調べといてやるよ」

「さすが！今日は夕飯うちで食ってけよ。ねーちゃんがカレー作るって言ってたし」

「お。ねーちゃんいるのか。んじゃ、俄然行く気になった」

「お前えええ！！やっぱ狙ってんじゃねーか！！」

「おっばいをな」

「やめろ！生々しい！！！」

.....

「今日はお前ん家、ねーちゃん以外いねーの？」

「じゃなきゃねーちゃんが飯つくるわけねえだろ」

「だろうな。あ、そういや、確認してみたぜ、ドラちゃん飼っているのか」

「おー。仕事早えな！ で、どうだった」

「つーか、まず、日本に居ること自体がおかしい」

「……いや、そんなの言われなくてもわかってるって」

「ん、まあ、そうなんだけどさ。結論から言うと、日本じゃ別にお事は禁止されてないが、届出は必要らしいぞ。だけど、どう考えても不正な手段で日本に来たって線が濃厚だから、まあ、届け出たからって継続してお前ん家で飼えるかって言うと、そこらへんは定かじゃないな」

「そっか……」

「まあ、コモドドラゴンなんて大物、個人で飼い続けるなんて大変だぞ。お前ん家の人たちはいいけど、周りが怖がるだろ。どうみても肉食だし」

「そうだよなあ……。子どもドラゴンだからまだいいけど、これからどんどん大きくなっていくだろうし……」

「……なあ、さっきから思ってたんだけどよ、お前、なんか……ちよいちよい噛んでる？ ちゃんと教えてねえぞ、コモドドラゴン」

「いや、そりゃこっちの台詞だって。おれの聞き違いかと思ってたけど、もう一回言ってみるよ。子どものドラゴンって」

「……いや、だから、コモドドラゴンだろ」

「いやいや、言えてねーよ。噛んでるよお前。子どもドラゴン」

「……さて、お前の言ってる言葉が正しいんだとしたら、俺はなんかスゲー勘違いを……」

「こら、あんたたち、玄関前でなにしてんの。邪魔でしょー、高二男子二人が玄関先で揉み合ってたら。いかがわしい小説のネタに使っちゃうぞーう」

「おいこら、ねーちゃん、ふざけんなよそんなことしやがったらねーちゃんのコスプレ衣装ブランドに干すからな！ つーか、今から飯作るのかよ。食えんの何時だ。おい……明弘^{あきひろ}、ねーちゃんの一部を凝視すんな」

「……はっ！！ すまん、つい……。夏っていいよな……」

「孝^{たかし}がいなくても遊びに着なさいね、明弘くん。ちゃんと、似合う衣装用意してあげるから！ うふふふふ！ ……あ、こんなことしてる場合じゃなかったわ。ドラちゃんのご飯先にあげなきゃ！」

「あ、ほら、見ろよ明弘。ドラちゃんって名前呼ぶと、飛んでくるんだよ」

「……おい、孝、おい！ ホントに『飛んで』きたぞ……！！！」

「だから、そう言っただろ。こんなチビなのに、ちゃんと羽で飛べるんだからスゲーよな」

「どら、ドラゴン、だ……。鱗青い……。ドラゴン」

「お前なあ……おれは朝からドラゴンだって言ってただろ。信じてなかったのかよ」

「お前が……お前が！ コモドドラゴン……じゃねえや、子どもドラゴンとか言うからだろうが！！ 紛らわしいんだよ！！！」

「は？　つーか、コモドドラゴンって……、まだ言ってるの？　そんなに何回も噛むほど言い辛いかな？」

「……もしかして、孝、お前……コモドドラゴンしらねえのか？
コモドオオトカゲとか……」

「は？ いやだから、子どものドラゴンってのをお前が言えなくて……」

「ちげえ ええええええ！！！！！」

コモドオオトカゲ または コモドドラゴン

動物界脊索動物門爬虫綱有鱗目オオトカゲ科オオトカゲ属に分類されるトカゲ。コモドドラゴンとも呼ばれる。

「ウィキペディア（Wikipedia）：フリー百科事典
日本語版」

END

- - - - -
孝^{たかし} - - - - -

> 高校二年の男子。黒髪短髪。
> バレンタインのチョコは毎年固定客から2個。他、一見さんから2つ程度もらえればいいほう。
> スキー部所属。現在自主トレーニング期間と言つ名前の帰宅部状態。
> 庭で子どもドラゴンを見つけた第一発見者。
> コモドドラゴンの存在自体知らなかった。社会系の科目はいつも赤い点数。

あきひろ
明弘

> 高校二年の男子。茶髪でチョイ長い髪。生活指導に先生に怒られる程度。
> バレンタインチョコは固定客から5個。他、一見さんから気がつけばいくつも貰っている。
> 茶道部。和菓子に釣られて入部した。最近調理部と一緒に茶菓子を作るのが楽しい。
> 孝のやつ、滑舌ワリいなあ、と、生温い目で見ていたのだが、自分が間違っていたと判明。しかし、うやむやにごまかし、孝のせいになっている。

孝のねーちゃん
> 社会人女性。長い黒髪で、胸がでかい。休日とコスプレのときだけ化粧がケバいい。

> バレンタインチョコは家族と弟の友達、自分へ買う。時々女の子から本気のチョコを貰うことがある。

> 胸を生かしたコスプレや、身長を生かしたコスプレをする、オタク系。

> ドラゴンを猫かわいがりしている。

子どもドラゴン（ドラちゃん）

> 青い鱗の小さなドラゴン。孝の家に拾われ、すくすく育っている。

> 雑食。孝と一緒にお菓子を食べるのが好き。

> ビックリすると、火を吐くことがある。嬉しいときも火を吐くときがある。

> 異世界からこんにちは　しちゃった、セイントドラゴンという種類のドラゴン。

> そのうち言葉もしゃべるかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3768u/>

隣のコードドラゴン様

2011年6月27日13時21分発行